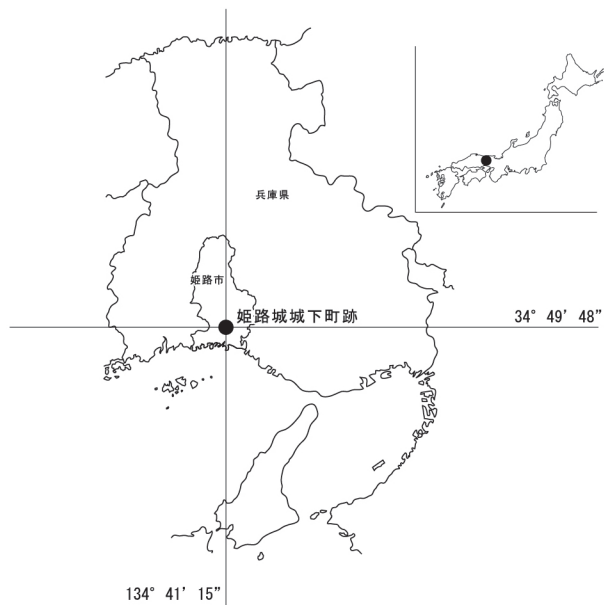


# 姫路城城下町跡

—姫路城跡第290次発掘調査報告書—



2013（平成25）年3月

姫路市教育委員会

## 序

姫路城は、本市の象徴であるとともに、わが国を代表する文化財のひとつです。西国将軍と呼ばれた池田輝政の手によって17世紀初頭に完成した白亜の天守群は、日本の城郭建築の最高峰として、400年の歳月を経た今日もなお、その威容を誇っています。

平成5年12月、姫路城が法隆寺地域の仏教建造物とともに日本初の世界文化遺産に登録されたことは、本市の大きな誇りであります。また、平成21年度から5年をかけて実施している大天守の保存修理工事では、見学施設「天空の白鷺」で匠の技を間近にご覧いただき、姫路城を未来に引き継いでいく取り組みを進めています。

城の周囲に広がる城下町は、三重の堀によって、中枢部である内曲輪、武家屋敷が立ち並ぶ中曲輪、町屋や寺社を中心とした外曲輪に区分されていました。現在、内曲輪・中曲輪の大部分は世界遺産および特別史跡として保護・顕彰が図られています。また、外曲輪は江戸時代以来今日にいたるまで、姫路の経済の中心地として発展し、現在も播磨の中核都市に相応しいまちづくりが進められています。

このたび、忍町において発掘調査を実施し、外堀に面した城下町南端部の遺構を確認することができました。ここにその成果を報告し、姫路城跡の調査・研究の進展に資する所存であります。

最後に、事業実施にあたり多大なご協力を賜りました株式会社アンゼンコーポレーション、栗本建設工業株式会社、有限会社松浦興業、その他関係者の皆様に心から御礼申し上げます。

平成25年(2013年)3月31日

姫路市教育委員会

教育長 中 杉 隆 夫

## 例 言

1. 本書は、兵庫県姫路市忍町83番地、75番地に所在する姫路城城下町跡(兵庫県遺跡番号 020169)の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社アンゼンコーポレーションの委託を受け、姫路市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、姫路市埋蔵文化財センター 森 恒裕・中川 猛・黒田祐介が担当した。
4. 整理作業は、平成24年度に姫路市埋蔵文化財センターで実施した。
5. 発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位はすべて座標北である。標高は東京湾平均海水準(T.P.)を基準とした。
6. 土層名は、『新版標準土色帳』(1999年度版)に準拠した。
7. 本書で使用した遺構番号は、遺構種ごとに付けた。各遺構種は以下のとおり呼称した。  
土坑：SK      ピット：SP      その他の遺構：SX
8. 本書の執筆・編集は、森が行った。
9. 本報告に係る遺物・写真・図面等は、姫路市埋蔵文化財センターに保管している。



## 1 調査に至る経緯と調査・整理の体制

姫路市忍町83番地、75番地において、株式会社アンゼンコーポレーション(以下、「事業者」という。)による集合住宅の建設工事が計画された。事業地は姫路城城下町跡(兵庫県遺跡番号：020169)に含まれ、江戸時代の城下町絵図によれば、姫路城の南部外堀およびその北側の土塁、組屋敷、街路に該当している。

姫路市教育委員会では、平成24年(2012)5月22・23日、事業地内の遺構の有無・保存状態を把握するために確認調査を実施した(調査番号20120049, 姫路城跡第283次調査)。事業地北部・南部に5m×1mの調査区を各1箇所設定した結果、北部では江戸時代の土坑などを確認し、遺構が良好に保存されていることが判明した。このため、事業者と委託契約を締結し、本発掘調査を実施することとした(調査番号20120216, 姫路城跡第290次調査)。調査対象面積は事業地北部の90.5㎡である。現地での調査は平成24年10月18日に開始し、10月27日に終了した。現地作業終了後、姫路市埋蔵文化財センターにおいて出土遺物の整理作業を実施した。なお、事業地南部については、現地表下1.8m以上まで外堀の埋立土が及び、石垣などの遺構を検出できなかったことから、工事中に立会を行い、堀内の水中堆積層の有無を確認することとした。

現地調査開始から整理作業終了までの調査体制は、以下のとおりである。

### 姫路市教育委員会

教 育 長 中杉隆夫

教育次長 林 尚秀

### 生涯学習部

部 長 小林直樹

### 文化財課

課 長 福永明彦

係 長 大谷輝彦(調整・事務)

### 埋蔵文化財センター

館 長 秋枝 芳

係 長 岸本幸男(庶務)

森 恒裕(調査・事務)

技術主任 小柴治子

中川 猛(調整・事務・調査)

福井 優

南 憲和

主 事 嶋田 祐(庶務)

技 師 堀本裕二

技 師 補 黒田祐介(調査)

臨時職員 覚野郁子・香山玲子・清水聖子・田中章子・玉越綾子・寺本祐子・野村知子・

藤村由紀・三輪悠代(遺物整理)



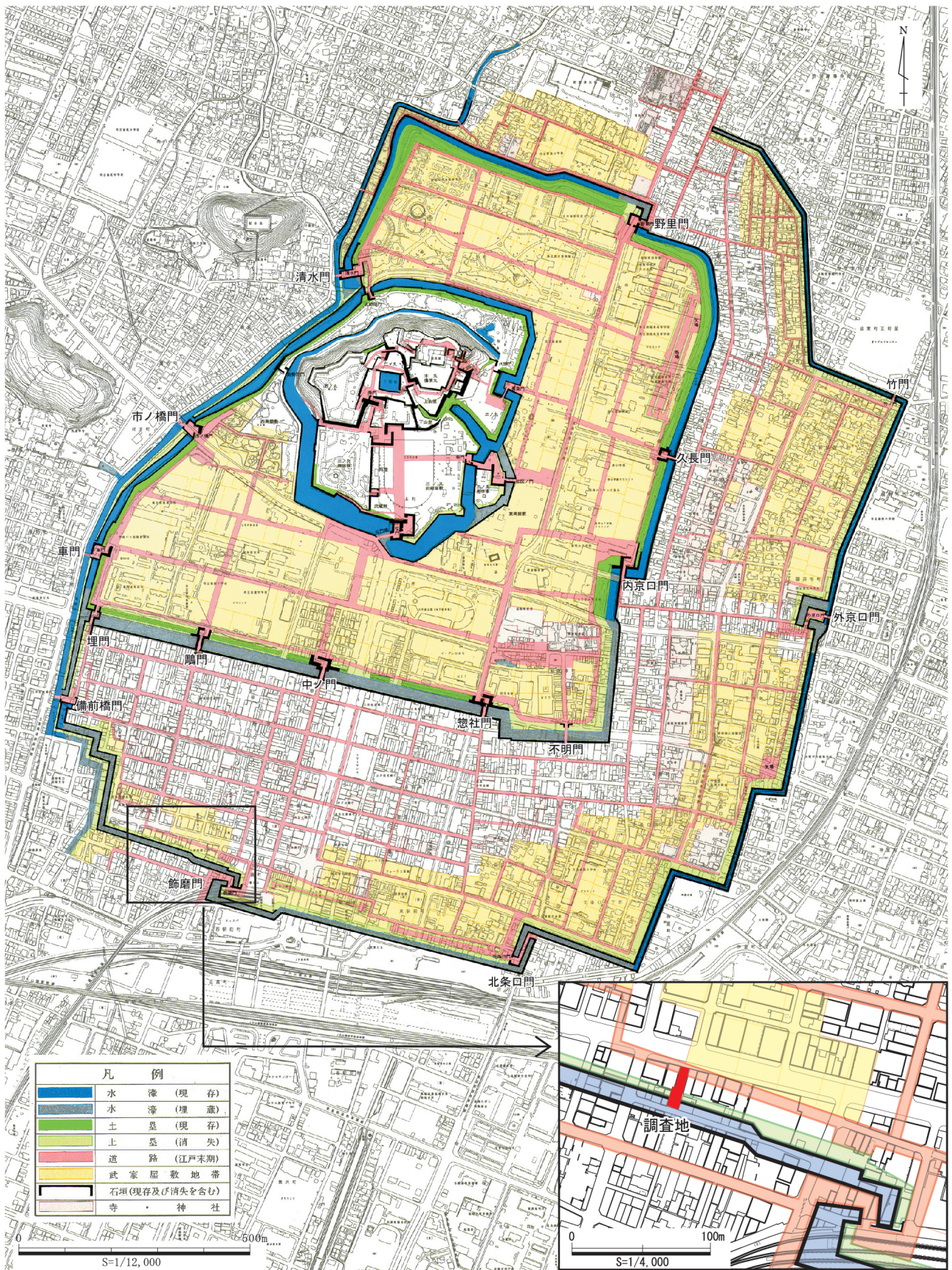


図1 調査位置図  
 [『姫路城跡(城郭図)』(姫路市1986・2003)を一部改変・加筆]



## 2 絵図類にみる調査地の様相

調査地はJR姫路駅の北西、直線距離で約400mに位置する。江戸時代の城下町絵図によれば、当該地は姫路城外曲輪の南西隅付近に該当する。しかし、近代以後城下町の遺構は失われ、姫路市の中心市街地となって今日に至っている。

ここでは、江戸時代後期、酒井氏時代の『姫路侍屋敷図』（寛延2年～文化13年・1749～1816の作図）に基づき、往時の調査地周辺の様相を概観したい。

調査地の東南東約160m、現在の山陽電鉄姫路駅の西には飾磨門があった。外堀は門から西へ約320m進んだのち北に折れ、複数回屈折して船場川沿いに開口する備前門に至る。外堀の両側面には石垣が積まれ、また城内側に比較的小規模な土塁が付属していた。飾磨門内の東西街路と外堀・土塁との間には組屋敷が置かれている。現況と絵図とを重ねてみると、図1のとおり、調査地は南から順に外堀・土塁・組屋敷・東西街路の位置に比定することができよう。

こうした調査地周辺の構造は、江戸時代を通じて大きく変更されていない。ただ、各期の絵図を比較すると、第一次榊原氏時代(慶安2年～寛文7年・1649～1667)の『姫路御城廻侍屋舗新絵図』では、土塁のすぐ北に東西街路が描かれており、組屋敷の敷地はみられない。次の第二次松平氏時代(寛文7年～天和2年・1667～1682)の絵図には、土塁と街路の間に細長い敷地が表れる。絵図の描写からは、この敷地は17世紀中期に新設されたことが窺える。周囲の町割りが変化していないことを勘案すれば、土塁の一部を撤去して組屋敷のスペースを確保した可能性も否定できない。

上記の外堀や土塁などは、姫路の近代化のなかで次第に姿を消していった。明治30年代の地図類や大正元年(1912)測図の『姫路市全図及其附近』によれば、飾磨門の柵形などはすでに失われていたものの、外堀については何らかの形で存続していたことが読み取れる。一方、大正14年(1925)の『姫路市地番地図』では外堀は完全に失われ、跡地には現在と同様の東西道路が描かれている。調査地付近で城門・堀・土塁といった城下町の基本構造が完全に失われたのは、大正時代のことと考えてよいであろう。

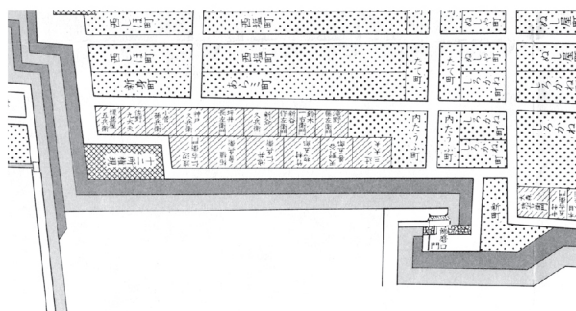


図2 『姫路御城廻侍屋舗新絵図』（解読図・部分）  
（第一次榊原氏時代）

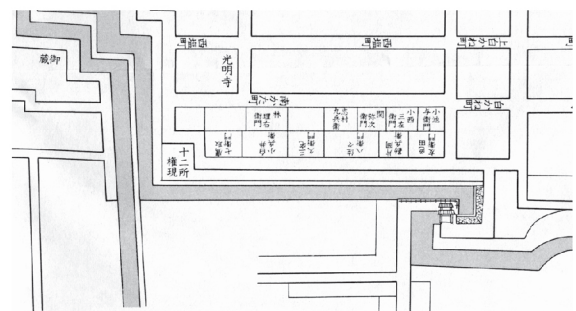


図3 姫路城城下町絵図(解読図・部分)  
（第二次松平氏時代）

※図2・3出典：『姫路市史』第十巻 史料編 近世1 付図、姫路市史編集専門委員会、1986

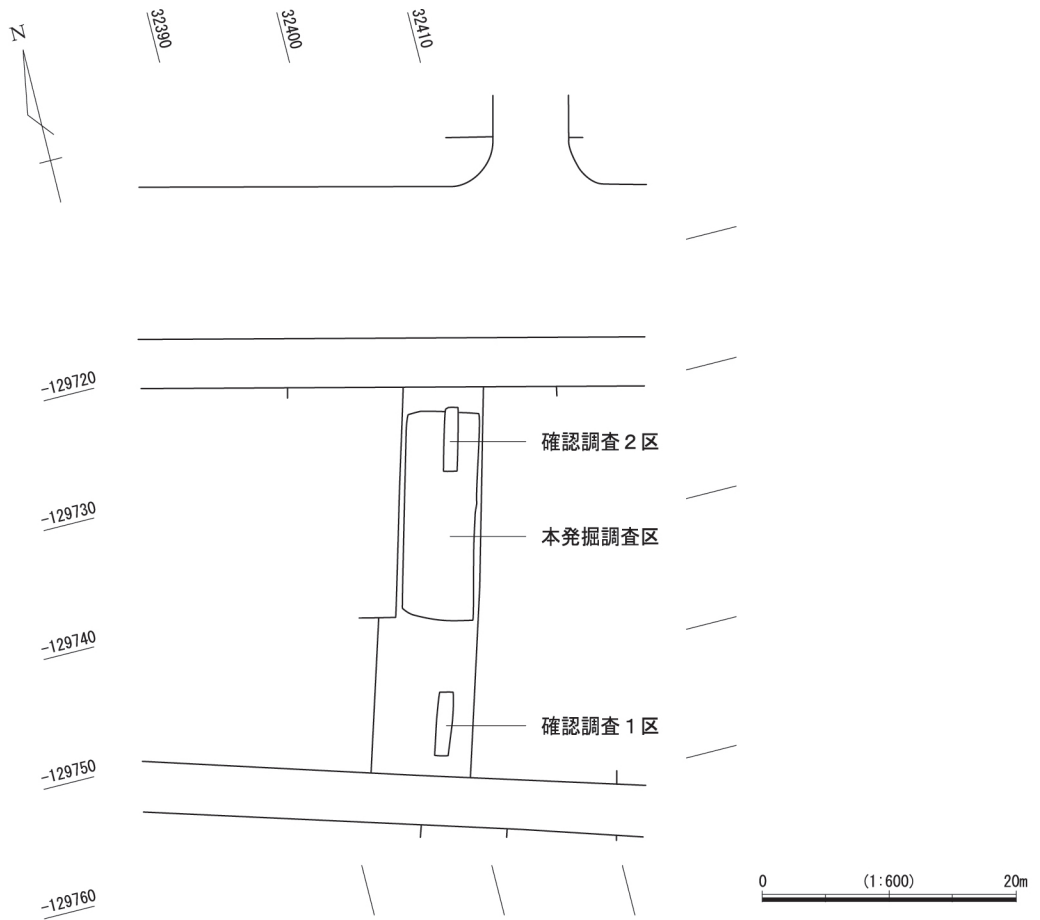


図4 調査区配置図

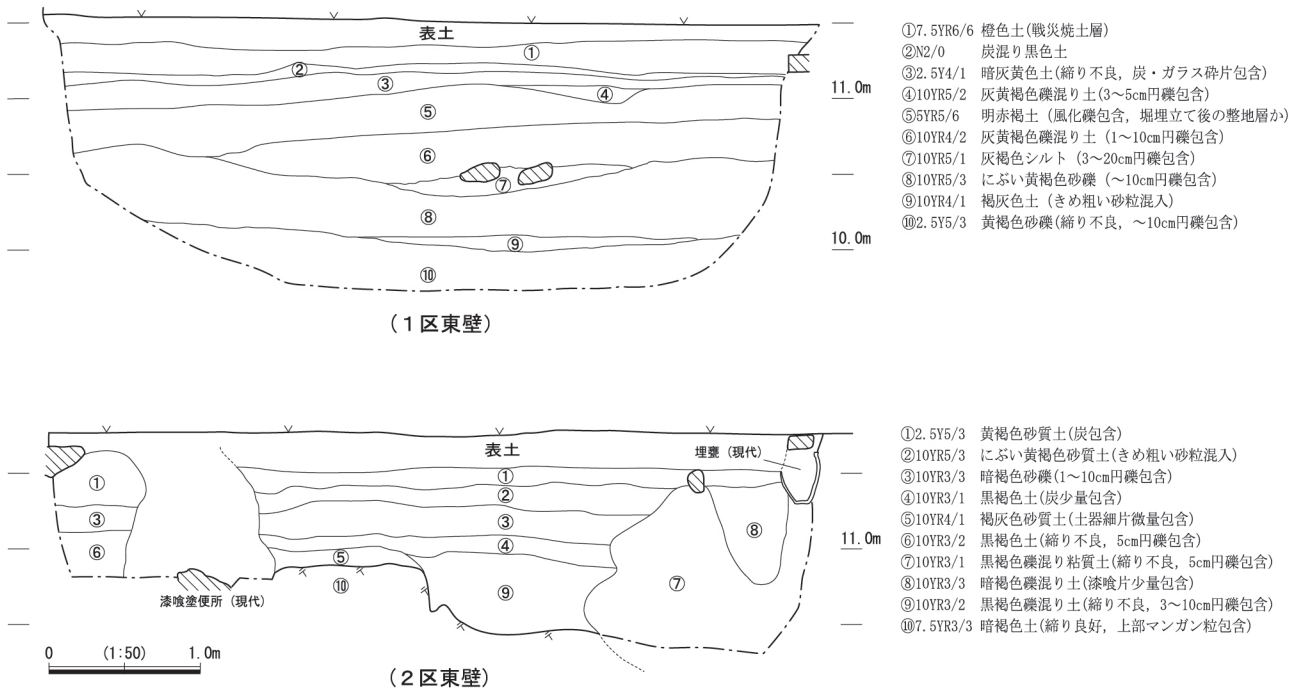


図5 確認調査 土層断面図

### 3 本発掘調査の成果

確認調査の成果に基づき、表土層および近代以後に形成されたとと思われる土層を重機で除去した後、遺構検出・遺構発掘作業を行った。検出作業は標高約11.0mの褐灰色砂質土層(図5, 2区東壁⑤層)あるいは暗褐色土基盤層(同⑥層)上面で実施している。

遺構の埋土は2種類に大別できる。一方は直径20cm以下の円礫を多く包含する黄灰色～灰褐色土を埋土とするもので、SK01～SK10、SK14およびSX01がこれに該当する。他方は基盤層上面で検出される灰白色砂質土埋土の遺構で、SK11～SK13、SP01～SP05が該当している。出土遺物から、前者は江戸時代、後者は奈良～平安時代の遺構である。

以下に主要な遺構の概要を報告する。

#### SK01

調査区北西隅で検出した土坑で、検出部最大径1.40mを測るが、調査区外に延びるため全体の形状・規模は不明である。微量の土師器の小片が出土したのみで、時期を特定できる出土遺物はない。

#### SK02

SK01の東に隣接する。検出部の最大径1.46m・深さ0.25m。埋土はSK01と同様の礫混り灰褐色土であるが、調査区外でSK01と切り合っている可能性がある。時期を特定できる出土遺物はない。

#### SK04

調査区北東部で検出した。長径1.74m・短径0.80mの長楕円形の土坑で、SX01の北東肩部を切る。検出面からの深さは0.68mで、基盤層を丸く掘り込んでいる。埋土は小礫混りの黄灰色砂質土で、炭を包含する。比較的しっかりした土坑であるが、出土遺物は少なく、近世の土師質土器皿のほか、須恵器甕の胴部破片などがわずかに出土したにとどまる。

#### SK05

調査区東部で検出した長楕円形の土坑で、SK06を切っている。長径1.80m・短径0.70m、深さ約0.25m。出土遺物は少量ながら、糸切り底の土師質土器皿、丹波焼鉢、丸瓦などがあり、18世紀代を上限とする遺構とみてよいであろう。

#### SK06

最大径1.65mの略円形の土坑で、SK05に切られる。出土遺物には肥前系磁器の染付蓋付碗(蓋)、紅皿、施釉陶器塀・行平、瓦などがある。蓋付碗(蓋)は外面に雲文を、内面にはコンニャク印判による五弁花文を有するもので、18世紀中～後期の資料である。他の出土遺物を含め、概ね18世紀後期の遺構とみることができる。

#### SK09

調査区西部で検出した略円形の土坑。今回の調査で検出した土坑の中では最大の規模を有し、最大径は2.60m、検出面からの深さは0.75mを測る。遺物も比較的まとまって出土している。代表的なものを図7に示した。

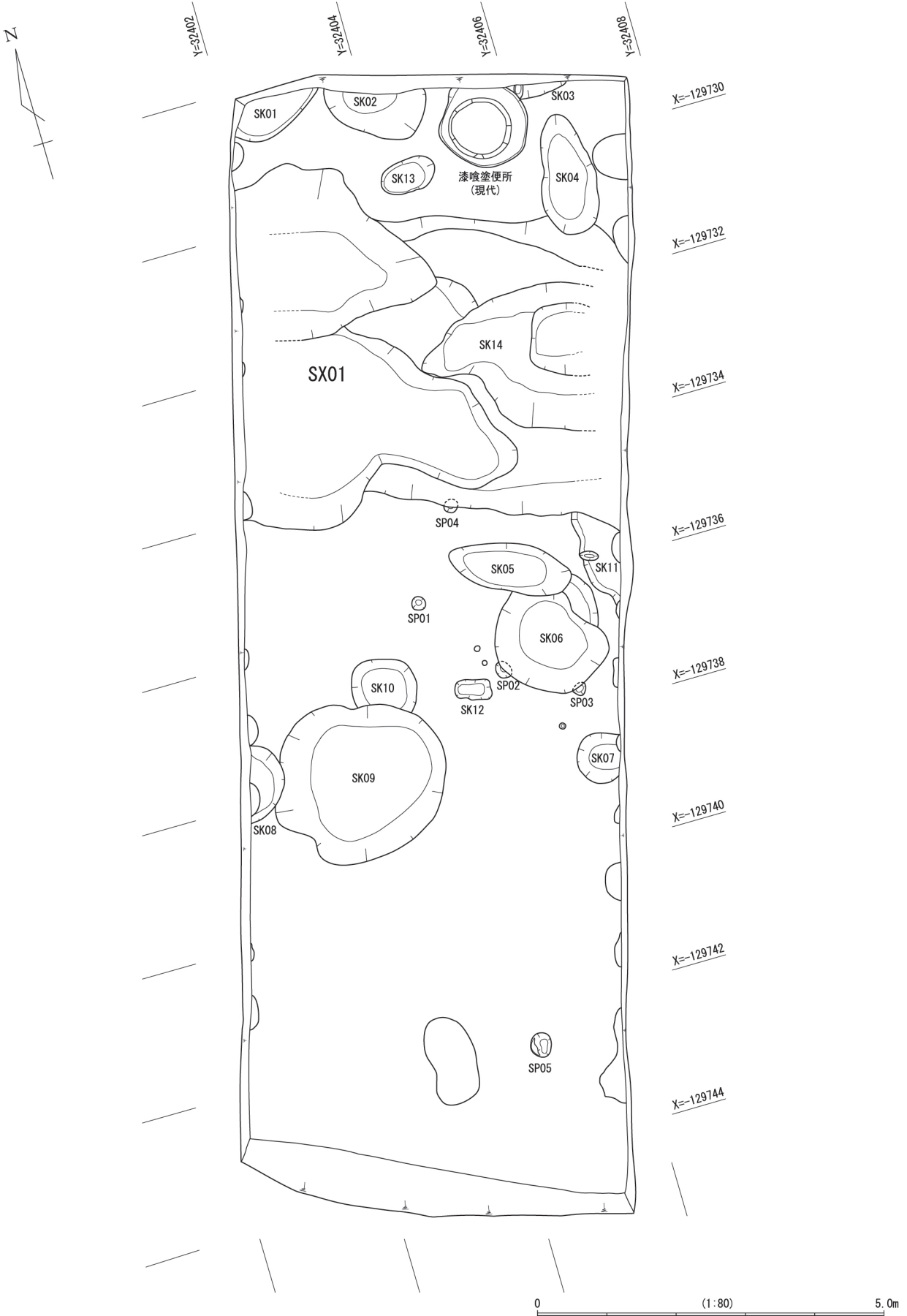


図6 調査区平面図



1～3は灯明具である。いずれも皿部の内面に柿釉を施す。3の台付灯明皿は皿部の外周部にスス、内面にタール状の付着物が認められる。

4・5は肥前系陶器の碗である。4は刷毛目碗で、高台部も豊付以外は全面施釉している。17世紀後期から18世紀代の資料である。5は撥形に開く高い高台をもつ、呉器手と称される碗である。豊付を除いて全面に透明釉を掛ける。やはり17世紀後期以降の資料である。6は産地不明の行平である。内面および底部を除く外面に鉄釉を掛けた後、外面上部に飛ガンナを施す。把手は基部から脱落している。

7・8は肥前系磁器の染付碗である。7は波佐見系と思われ、外面に粗雑な一重網目文を描く。高台の歪み、釉垂れ、釉切れが見られるなど雑な作りで、釉の発色も悪い。18世紀代の資料とみられる。8は端反碗で、外面に簡略化された人物および風景文、見込にも島と鳥？を描く。19世紀中期頃の資料である。

以上のとおり、遺物の帰属時期にはかなり幅があるものの、端反碗などの出土から、SK09は幕末期を遡らない遺構と判断できよう。

SK05・SK06・SK09周辺では、遺構面検出中にも江戸時代の遺物が出土している。これらの遺構から遊離したものと考えられる。図7-9は肥前系磁器の染付碗。いわゆる広東碗で、外面に植物文？、見込に蔓草文を描く。18世紀後期から19世紀初頭の資料である。10は肥前系磁器の染付鉢で、型打ち成形により体部を八角形とする。外面の文様は松葉状の区画線内に三点文と菱形文、内面は体部に捻花状の区画間に松・柳などを配した風景文、見込に風景文。高台は蛇目凹形高台で、チャツの痕跡が認められる。19世紀前期から中期の資料であろう。

写真のみ掲載した図7-11～13は肥前系磁器の染付碗である。11は18世紀後期、12・13は19世紀前期から中期に比定される。14は白釉と透明釉を掛け分ける施釉陶器小碗で、外面の白釉部分に山をはじめとした風景文を描く。また、掲載した資料以外にも、白磁角皿や瀬戸美濃系陶器の三足付盤が出土している。

## SX01

調査区北部で検出した。東西両側が調査区外に延びるため、全体の規模・形状は不明であるが、東西に長い土坑あるいは溝状を呈する。検出部の南北幅4.00～5.20m・深さ0.60mを測る。

埋土は礫混りの黄灰色土である。水中堆積土などは認められなかった。包含する礫の大きさや量、あるいは底部の状況からみて、ほぼ同一個所で数度にわたる掘削が繰り返されている可能性が高い。出土遺物には大谷焼の大甕、京・信楽系陶器の小杉碗など18～19世紀代の資料がみられる。遺構の規模に比して遺物量は非常に少なく、本遺構が廃棄土坑とは異なる性格をもつことを窺わせる。

## SK11

調査区東端部で検出した。北側はSX01に切られ、東側は調査区外に延びるため、規模・平面形は不明である。埋土は灰白色砂質土で、磨滅の著しい須恵器・土師器小片が出土した。

## SK12

調査区中央付近で検出した0.56m×0.28mの小土坑。埋土や出土遺物の様相はSK11と同様である。

なお、暗褐色基盤層の上面からは、奈良時代から平安時代にかけての須恵器杯・甕、布目瓦などが出土している。また、古いところでは古墳時代後期の蓋杯も認められた。ほとんどが小片であり、磨滅を受けているものも多いことから、近隣の遺跡から流入したものと考えることができる。

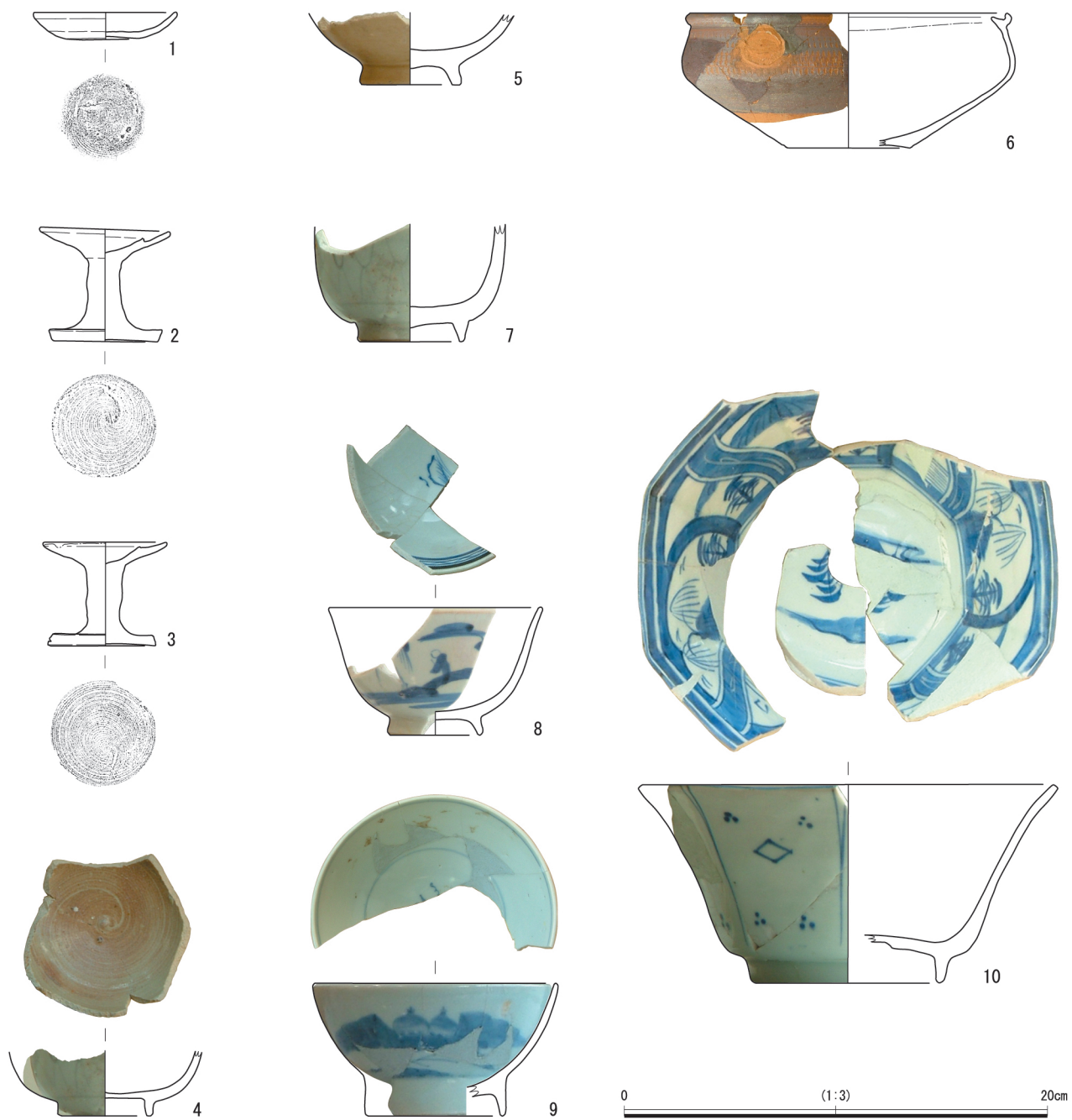


图7 出土遗物实测图

## 4 外堀の立会調査成果

調査地南部に比定される外堀については、確認調査時に現地表下1.8mまで調査したが、石垣や堀内の堆積土を確認することができなかった。このため、掘削工事中に立会を行い、外堀に関連する資料の収集に努めた。

調査の結果、現地表下2～4mで堀内堆積土とみられる暗灰色土を確認することができた。暗灰色土の検出範囲は調査地の南端から約11m北までの範囲である。検出深度は調査区西端で現地表下約2m、東半部では3.5～4mであり、東部では後世の改変が深い位置まで及んでいるものとみられる。堀の北側石垣は確認できなかった。

上記の暗灰色土確認位置と『姫路侍屋敷図』の描写とを対比してみると、外堀の位置が絵図の描写よりも数m北にずれている可能性がある。また、本発掘調査区南部のSK09以南では、江戸時代の遺構が全く検出されていない。土層などからは検証できていないものの、暗灰色土確認位置の北端とSK09の間、約5.8mの区間内に土塁が存在した可能性も指摘しておきたい。

## 5 まとめ

江戸時代の絵図によれば、今回の調査地には南から外堀・土塁・組屋敷・東西街路の存在が想定された。今回の調査成果がこれらの施設とどう関連するのかに触れて、まとめとしたい。

調査地の南端付近に比定される外堀については、現地表下2m以上の位置でようやく堀内堆積土が確認されたことから、近代以後に大規模な改変を受けたことが窺える。また、堀の位置は絵図の描写よりもやや北にずれる可能性がある。

堀の北側に位置する土塁は、本発掘調査区南端付近の空閑地に比定しておきたい。この想定が正しければ、土塁と組屋敷の境界は絵図の描写よりも5m程度北にずれる。

組屋敷については、建物礎石や井戸など、屋敷に直接関連する遺構は見つかっていない。土坑が本発掘調査区の北端まで認められることから、調査区全域が組屋敷のエリアに入っている可能性が高い。なお、江戸時代の土坑についてはいずれも18～19世紀代のものと考えられ、江戸時代前期の様相を示すものはない。

絵図の描写に従えば、調査地の北部には東西街路が比定される。しかし、調査区北端部まで土坑が掘られており、路面・路盤や側溝など街路の存在を積極的に示す遺構はみられなかった。前述のとおり、絵図の描写と実際の遺構とのズレがあるとすれば、実際の東西街路は調査区の北側、現在の市道十二所前線の下に存在するものと考えられよう。



図版 1



本発掘調査区全景（南から）



遺構検出状況（南西から）



SK04 (南西から)



SK06 (南から)



SK09 (南から)





図版 3



SX01 (北東から)



SX01 (東から)



SX01・SK14 (南西から)



## 報告書抄録

ふりがな	ひめじょうじょうかまちあと							
書名	姫路城城下町跡							
副書名	姫路城跡第290次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第8集							
編著者名	森 恒裕							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414 番地1 TEL (079) 252-3950							
発行年月日	平成25年(2013年) 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
ひめじょうじょうかまちあと 姫路城城下町跡	ひょうごけんひめじし 兵庫県姫路市 しのぶまち 忍町83番地, 75番地	28201	020169	34° 49' 48"	134° 41' 15"	2012. 10. 18 ～ 2012. 10. 27	90.5 m <sup>2</sup>	集合 住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			遺跡調査番号	
姫路城城下町跡	集落跡	江戸時代	土坑	土師質土器, 国産陶磁器, 瓦			20120216	
要約	調査地は姫路城外曲輪南西部に位置し、外堀・土塁・組屋敷・東西街路に比定される。検出した遺構は18～19世紀代の土坑を中心とする。立会調査の成果を加えて遺構の検出状況を検討すると、実際の遺構は絵図から想定される位置より北にずれる可能性がある。							

姫路市埋蔵文化財センター調査報告第8集

姫路城城下町跡－姫路城跡第290次発掘調査報告書－

平成25年(2013年) 3月31日発行

編集 姫路市埋蔵文化財センター

〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地 TEL (079) 252-3950

発行 姫路市教育委員会

〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本 丸山印刷株式会社

〒676-8566 兵庫県高砂市神爪1丁目11番33号